# 阪神地域における郊外生活文化の形成－人名録にみる新たな住民

永藤　清子*　新宅　賀洋**

Formation of Suburban Life & Culture in Hanshin Area
by the viewpoint of The gentleman record

Kiyoko EITO*　Kayo SHINTAKU**

**Summary**

In this report, analysis concerning the new inhabitant in Hanshin Area which includes Naruomura, Mukogun was tried. The gentleman record which is published to suburb life because of that and the directory which is issued in Meiji Taisho period were used. As a result, the bank clerk and the insurance company employee, the trade staff trading company member, the trade work person and the government employee etc had immigrated to suburb. These people, formed the life culture where the Hanshin Area is new. We would like to research the life culture whose Naruomura is new how was formed.

キーワード　Key Words
郊外生活　Suburban Life
阪神地域　Hanshin Area
大正期　Taisyo era
生活文化　Life Culture
紳士録　The gentleman record

## １．はじめに

阪神電気鉄道株式会社（以下阪神電気鉄道と表記する）が明治32年に設立され、明治38年４月大阪出入橋－神戸三宮の都市間を結ぶ鉄道の開業後、阪神間とりわけ大阪－神戸間の住宅地の人口が飛躍的に増大、大正期以降の阪神地域の郊外生活の形成に多大な影響を与えた。阪神電気鉄道沿線に新たに移住してきた住民の多くは、大阪や神戸に勤務するいわゆる新中間層や富裕層であった。阪神電気鉄道が沿線への移住促進のために発行した雑誌『郊外生活』には郊外に移住してきた住民の紳士録が掲載されている。ここには、関西の経済界を代表する事業家や医師、教授･教員、銀行員ら1,000人を超える住民の名が記録されている。筆者らは、阪神地域に移住してきた住民が、大正期以降、阪神電気鉄道沿線に新たな生活文化を形成する下地がここに誕生したことを報告した（永藤、2008）。

本報告では、『郊外生活』に掲載された紳士録、および明治大正期に発行された人名録をもとに、筆者らが郊外生活文化の研究対象としている兵庫県武庫郡鳴尾村を含む阪神地域における新たな住民についての分析を試みた。

## ２．研究方法

阪神電気鉄道発行の『郊外生活』に掲載され

＊　本学教授
＊＊　本学准教授

た「沿線紳士録」（阪神電車沿道に来往した主な住民の芳名調査、警察・村役場、大正２年末現在）、石川彦三郎代表者兼編纂者による「第15版日本紳士録」（明治43年、交詢社）および村上雄次郎著作兼発行者による「第29版日本紳士録」（大正14年、交詢社）を底本とする『明治大正昭和神戸人名録』を用いて、兵庫県武庫郡に居住する住民のデータを整理し分析した。また、大正10年武庫郡教育会が発行した『鳴尾村誌』を参考として取り上げた。

### ３．雑誌『郊外生活』にみる阪神電気鉄道沿線の新住民

沿線紳士録は、『郊外生活』大正３年第１巻第３号から大正３年第１巻第７号まで５回掲載された。当初は、「阪神電車沿道に来往せられたる主なる方々の芳名を調査して、御影町を筆頭に、上記町村の順序に本号以下毎号掲載することに致しました。この調査は警察署と町村役場とに就いて、成るべく正確を期したれど、多数のうち、或は遺漏、誤謬等もあるべく、これは追追訂正いたす筈であります。この調査が読者諸君のご便宜となれば甚だ幸であります。猶、上記の町村へ新たに御移住相成るか、又は既に御移住の方にて向後御住所変更の際には御勝手ながら、その都度下名へ御通知を願い度く、御差支えなくば「郊外生活」誌上にて御披露致し度く存じます。阪神電車「郊外生活」係。」（旧漢字および旧かなづかいは現代づかいに改めた。以下同様。）とあり、毎号新住民名を掲載する予定であったことがわかる。しかし、‘上記町村’と記された御影町、住吉村、魚崎村、本山村、精道村、六甲村、西宮町、本庄村、都賀浜村、西灘村，今津村、鳴尾村（当時すべて兵庫県武庫郡）のうち、掲載されたのは、御影町、住吉村、魚崎村、本山村、精道村、西宮町、本庄村の７町村だけであり、他の５村は掲載されないまま終わっている。

沿線紳士録には、対象とされる各町村の大正２年末現在の戸数、人口、氏名、職業又は会社名が記され、合計1,184人の住民が紹介されている。職業欄への記載は、会社名であったり、職業であったりして一定でないため、職業欄の内容から筆者らがジャンルわけを行い整理したものが、表１である。

最も掲載人数が多いのは御影町265人（掲載人数全体の22.4%）であり、西宮町240人（20.3%）、精道村229人（19.3%）、住吉村209人（17.7%）が続いている。職業別に見ると、最も多いのが銀行・保険関係の職業に就いている人で11.6%、次いで商館・商社5.7%。医師5.2%である。当時の大阪は、人口の集中による都市環境とくに衛生状態の悪化が社会問題化しており、大阪に住居を持たなくても仕事に不都合が無い役人や銀行員、裕福な商人や資産家等に対して、30分程度で大阪まで出勤可能な郊外への移住推奨と郊外生活のすばらしさが盛んに喧伝されていた。沿線紳士録では、実際に銀行員や保険会社社員、商館員・商社員、貿易従事者や公務員といった人々が郊外に移住してきている様子が確認できる。

つぎに町村別に職業をみると、御影町には紳士録に記載された人のうち実に20.8%もが、住友銀行、三十四銀行、日本銀行、三井銀行、三菱銀行、山口銀行、浪速銀行、北浜銀行、灘商業銀行といった銀行・保険会社社員であった。住吉村では11.5%、西宮町では10.4%が銀行・保険会社員で御影町と同様の会社に所属していることも確認できた。また、御影町と住吉村の２村に公務員・首長の50%が、御影町には、師範学校や女学校、大学教授等といった学校・教員の、実に55.６％が居住している。これらのこ

**表１　沿線紳士録にみる新住民の町村別職業別分類**

| （人、%） | 魚崎村 | | 住吉村 | | 精道村 | | 西宮町 | | 本庄村 | | 御影町 | | 本山村 | | 計 | 業種別構成比 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 医師 | 5 | 5.2 | 10 | 4.8 | 12 | 5.2 | 12 | 5.0 | 6 | 7.6 | 15 | 5.7 | 2 | 3.0 | 62 | 5.2 |
| 銀行・保険 | 7 | 7.3 | 24 | 11.5 | 16 | 7.0 | 25 | 10.4 | 6 | 7.6 | 55 | 20.8 | 4 | 6.1 | 137 | 11.6 |
| 公務員・首長 | 3 | 3.1 | 12 | 5.7 | 8 | 3.5 | 6 | 2.5 | 2 | 2.5 | 10 | 3.8 | 3 | 4.5 | 44 | 3.7 |
| 学校.教員 | 2 | 2.1 | 0 | 0.0 | 1 | 0.4 | 3 | 1.3 | 1 | 1.3 | 10 | 3.8 | 1 | 1.5 | 18 | 1.5 |
| 議員 | 0 | 0.0 | 1 | 0.5 | 0 | 0.0 | 1 | 0.4 | 0 | 0.0 | 1 | 0.4 | 0 | 0.0 | 3 | 0.3 |
| 株式 | 2 | 2.1 | 6 | 2.9 | 4 | 1.7 | 5 | 2.1 | 7 | 8.9 | 3 | 1.1 | 0 | 0.0 | 27 | 2.3 |
| 建築 | 1 | 1.0 | 4 | 1.9 | 7 | 3.1 | 4 | 1.7 | 1 | 1.3 | 6 | 2.3 | 0 | 0.0 | 23 | 1.9 |
| 酒造 | 7 | 7.3 | 4 | 1.9 | 0 | 0.0 | 17 | 7.1 | 2 | 2.5 | 21 | 7.9 | 1 | 1.5 | 52 | 4.4 |
| 商館・商社 | 7 | 7.3 | 15 | 7.2 | 10 | 4.4 | 7 | 2.9 | 1 | 1.3 | 20 | 7.5 | 7 | 10.6 | 67 | 5.7 |
| 商船･船舶 | 1 | 1.0 | 10 | 4.8 | 7 | 3.1 | 7 | 2.9 | 0 | 0.0 | 11 | 4.2 | 0 | 0.0 | 36 | 3.0 |
| 呉服･洋服 | 10 | 10.4 | 3 | 1.4 | 3 | 1.3 | 2 | 0.8 | 5 | 6.3 | 4 | 1.5 | 3 | 4.5 | 30 | 2.5 |
| 鉄工・鉱業 | 2 | 2.1 | 5 | 2.4 | 1 | 0.4 | 1 | 0.4 | 1 | 1.3 | 4 | 1.5 | 3 | 4.5 | 17 | 1.4 |
| 電気・鉄道 | 0 | 0.0 | 8 | 3.8 | 5 | 2.2 | 8 | 3.3 | 0 | 0.0 | 10 | 3.8 | 0 | 0.0 | 31 | 2.6 |
| （うち阪神電気鉄道） | | | | | | | 2 | | | | 5 | | | | 7 | 0.6 |
| 新聞 | 5 | 5.2 | 6 | 2.9 | 6 | 2.6 | 7 | 2.9 | 1 | 1.3 | 5 | 1.9 | 0 | 0.0 | 30 | 2.5 |
| 貿易 | 1 | 1.0 | 8 | 3.8 | 4 | 1.7 | 1 | 0.4 | 0 | 0.0 | 5 | 1.9 | 2 | 3.0 | 21 | 1.8 |
| 紡績･生糸 | 1 | 1.0 | 2 | 1.0 | 7 | 3.1 | 9 | 3.8 | 4 | 5.1 | 8 | 3.0 | 3 | 4.5 | 34 | 2.9 |
| 園芸 | 0 | 0.0 | 1 | 0.5 | 1 | 0.4 | 2 | 0.8 | 0 | 0.0 | 1 | 0.4 | 0 | 0.0 | 5 | 0.4 |
| 書家 | 0 | 0.0 | 0 | 0.0 | 1 | 0.4 | 4 | 1.7 | 0 | 0.0 | 0 | 0.0 | 0 | 0.0 | 5 | 0.4 |
| その他 | 47 | 49.0 | 97 | 46.4 | 144 | 62.9 | 132 | 55.0 | 43 | 54.4 | 82 | 30.9 | 37 | 56.1 | 582 | 49.2 |
| 沿線紳士録記載人数 | 96 | 100.0 | 209 | 100.0 | 229 | 100.0 | 240 | 100.0 | 79 | 100.0 | 265 | 100.0 | 66 | 100.0 | 1,184 | 100.0 |

『郊外生活』「沿線紳士録」より報告者作成

とから‘大阪に住居を持たなくても仕事に不都合が無い役人や銀行員’の多くが‘阪神電車沿道に来往’していることがわかる。また、魚崎村では呉服商、洋反物業、洋服・ネル商といった洋服・呉服関係の職業の住民が10.4%、本山村ではシーメンス社、三井物産といった商館・商社員が10.6%と高い割合になっている。阪神電気鉄道関係者も沿線紳士録に７名掲載されており、専務取締役の今西林三郎は西宮町に、雑誌『郊外生活』編集者で運輸課長の太宰政夫は御影町に居住している。

この地域に居住した事業家・資産家には、岩井商店（後の日商岩井）を設立した岩井勝次郎（御影町、明治38年土地取得）、朝日新聞の創業者村山龍平（御影町、明治33年土地取得）住友家総理事の鈴木馬左也（御影町、明治38年土地取得）、住友銀行初代支配人田辺貞吉（住吉村、明治38年土地取得）、当時の久原財閥総帥で現日立グループ創設者久原房之助（本山村、明治37年邸宅建築）などがあり、これらの富裕層による郊外住宅地形成に関する先行研究は多い。

## ４．『明治大正昭和神戸人名録』にみる郊外生活者

『明治大正昭和神戸人名録』の底本となっている「第15版日本紳士録」（明治43年、交詢社）および村上雄次郎著作兼発行者による「第29版日本紳士録」（大正14年、交詢社）には掲載基準が設けられている。「第15版日本紳士録」では、東京、横浜、名古屋、京都、大阪、神戸とその付近に居住して、所得税21円（非常特別税含む）以上納入者、営業税のみ61円以上納入者、所得税21円以上と営業税51円以上納入者である。また、「第29版日本紳士録」では、東京（東京市、荏原・豊多摩・北豊島・南足立・南葛飾郡）、横浜（横浜市、久良岐郡）、名古屋（名古屋市、愛知・西春日井郡）、京都（京都市、

愛宕・葛野郡)、大阪（大阪市、三島・豊能郡)、神戸（神戸市、西ノ宮市、武庫郡）に居住して、所得税41円以上、または営業税61円以上納入者が基準である。明治43年および大正12年頃の所得税額からみて、どの程度の生活水準かについて明らかにする必要があるが参考となる資料が少ない。入手できた『農家経済調査』（農商務省農政局、大正13年)、『労働者の家計調査』（大阪市社会部労働課、昭和８年）『給料生活者の家計調査』（大阪市社会部労働課、昭和９年）を参考にして若干の検討を行う。

大正13年の『農家経済調査』は、農商務省農政局が全国21府県農会に委嘱して、大正10年３月１日より大正11年２月末日までの１年間、自作32戸・自作兼小作33戸・小作35戸の計100戸の農家に経済状態を記帳させ集計したものである。これによれば、農業及び農業以外の所得をあわせた合計農家所得（農家総収益より農家経費を控除して算出したもの）は、平均1067.631円である。ちなみに自作農家のそれは1381.040円、小作農家は765.771円であり、自作農家と小作農家とでは615.269円の差があり、所得に大きな格差がある。当時は多くの農家が小作であった状況を考えると、農家経済生活の実態は平均値よりも低いといえよう。また、農家所得から家計費を引いた差引過不足についても報告されている。これによれば自作124.541円、小作35.093円、平均86.069円の残高である。しかし一方で、家計費不足戸数が自作農家で32戸中11戸、小作農家で35戸中14戸、合計でも100戸中37戸あり、約４割に近い農家が家計費を充足しない所得状況であることがわかる。

大正13年『農家経済調査』の中で、大正２年３月から大正３年２月の１年間160戸の農家を対象にした帝国農会調査結果が紹介されているが、これによれば、農家所得平均851.569円である。昭和９年度の『農家経済調査』では、農家所得平均は732.28円で、大正２年の調査結果よりも所得が減少していることを考えると、農家経済の逼迫状況を覗いしることが出来る。

つぎに、１ヵ月家族一人平均家計費についてみると、帝国農会の大正２－３年調査結果では7.687円、大正10年の農商務省工務局調査の職工其他賃金生活者の生計費に関する調査結果では、大阪の職工の同平均家計費は16.510円、大正13年農家経済調査結果では11.708円となっており、農家経済が職工の家庭よりも厳しいことが覗える。

『給料生活者の家計調査』は、昭和７年９月１日から１年間、公職員中官公吏16世帯、教職員８世帯、巡査消防手５世帯、銀行会社員64世帯の計93世帯の家計収支を明らかにしたものである。大正14年の日本紳士録の時期より遅く、社会経済情勢の変化が大きい時期ではあるが、公務員・教員・銀行会社員等、対象となる階層が近いと思われるため、参考としてあげたい。それによれば、給料生活者の１ヵ月の実収入平均は98.32円、一人当たり実収入は26.22円である。ちなみに、労働者は１ヵ月の実収入平均は91.04円であり、給料生活者の収入の方が多いという結果が見られた。集計表より１ヵ月家族一人平均家計費を算出すると、給料生活者は、１世帯平均実人員3.80人で家計費総額87.18円、一人平均22.9円であり、労働者は、１世帯平均実人員3.97人家計費総額81.20円、一人平均20.5円となっている。

昭和９年度の『農家統計調査』でみた農家所得平均を１ヵ月に換算すると61円となり、給料生活者との収入格差が１ヵ月40円近くにもなることがわかった。

以上みてきたようにいくつかの農家や給料生活者の経済調査結果から考えると、人名録掲載

の基準である所得税額は、農家あるいは給料生活者の所得や収入に対してかなりの比率を占めることになる。そのことから紳士録に記載された人々は、農家は言うまでもなく職工・労働者、給料生活者の平均的家庭よりもはるかに高い所得水準にある階層であることが推測される。このことについては、今後より多くの資料に当って明らかにしていきたい。

「第15版日本紳士録」および「第29版日本紳士録」から、前述の沿線紳士録に沿って武庫郡に居住している住民について整理したものが表２である。

本表では、大正14年４月１日に西宮町が西宮市に市制施行になったことの理由により、西宮町をのぞいた。しかし、阪神地域の郊外生活文化を考察するに当っては、西宮町は重要な位置を占めるため、別途詳細な検討を行ないたい。また、郊外生活の沿線紳士録には掲載されていなかったが、筆者らが研究対象地域としている兵庫県武庫郡鳴尾村を加えて作成した。

**表２　人名録掲載の阪神電車沿線の武庫郡住民**

| | 明治43年（人） | 大正14年（人　%） | |
|---|---|---|---|
| 魚　崎　村 | 1 | 149 | 5.1 |
| 住　吉　村 | 3 | 471 | 16.1 |
| 精　道　村 | 0 | 572 | 19.6 |
| 本　庄　村 | 0 | 106 | 3.6 |
| 御　影　町 | 0 | 553 | 19.0 |
| 本　山　村 | 1 | 76 | 2.6 |
| 鳴　尾　村 | 1 | 83 | 2.8 |
| 他の町村（含む西宮町） | 1 | 908 | 31.1 |
| | 8 | 2,918 | 100.0 |

『明治大正昭和人名録』より報告者作成

明治43年の「第15版日本紳士録」では、武庫郡に居住し、掲載されている住民は５町村の８人に過ぎなかったが、大正14年の「第29版日本紳士録」では、2,918人と急増している。なかでも、『郊外生活』沿線紳士録に取り上げられていた魚崎村、住吉村、精道村、本庄村、御影町、本山村で武庫郡の掲載人数の66.1%を占めており、いかにこれらの地域に住民の移住が多かったがわかる。「第29版日本紳士録」には鳴尾村の住民が83人掲載されている。前述の沿線紳士録と同様に職業別に整理し表３に示した。

**表３　紳士録にみる鳴尾村住民の職業別分類**

（人）

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 医師 | 2 | 建築 | 3 | 鉄工・鉱業 | 1 |
| 銀行・保険 | 7 | 酒造 | 3 | 電気・鉄道 | 2 |
| 公務員・首長 | 8 | 商船・船舶 | 1 | 農業 | 7 |
| 学校・教員 | 2 | 新聞 | 1 | 地主 | 2 |

『明治大正昭和人名録』より報告者作成

武庫郡の他の町村と同様、銀行・保険（７人）、公務員・首長（８人）といった職業の人が他の職業より多いが、農業が７人、地主が２人掲載されている。阪神電気鉄道の発展にともなう鳴尾村の郊外宅地開発の影響かと思われるが、今後、武庫郡の他の町村の整理・分析を行なうなかで明らかにしていきたい。

参考として、大正10年に武庫郡教育会発行の『武庫郡誌』から、明治37年から大正８年にいたる15年間の武庫郡および武庫郡鳴尾村の職業別戸数の推移を作成し表４、表５に示した。

武庫郡全体で見ると、明治37年には農作業に従事していた人が全体の約半数を占めていたが、５年後の明治42年には約３割強、15年後の大正８年には約２割に減少している。増減率でみると、農作業に従事する人は全体的には減少であるが、内訳をみると自作農が減少、小作農が若干増加していることがわかる。新しい職業として増加がみられるのは、工業、商業、交通業、日雇及労働者、雑業、家事使用人、公務及自由業であり、先にみてきた郊外住宅地への移住者として推奨された人々が含まれていると推察される。

つぎに鳴尾村の職業別戸数についてみると、農作業は全体的にはやや増加しているが、これ

### 表4　武庫郡職業別戸数の推移

（戸）

| | 明治37年 | 明治42年 | 大正３年 | 大正８年 | 大正８年の増減率（明治42年＝100） |
|---|---|---|---|---|---|
| 農作業 | 6,711 | 6,180 | 6,149 | 5,614 | 90.8 |
| 自作 | | 1,551 | 1,432 | 1,081 | 69.7 |
| 兼作 | | 1,581 | 1,514 | 1,255 | 79.4 |
| 小作 | | 3,048 | 3,203 | 3,278 | 107.5 |
| 園芸業 | | 49 | 86 | | |
| 養蚕業 | | 1 | 2 | | |
| 茶業 | | 4 | 8 | | |
| 林業及狩猟業 | | 8 | 12 | | |
| 飼業 | | 29 | 42 | | |
| 漁業及採藻業 | 513 | 465 | 493 | 298 | 64.1 |
| 工業 | 1,480 | 2,379 | 3,311 | 4,337 | 182.3 |
| 商業 | 4,178 | 4,519 | 6,652 | 5,902 | 130.6 |
| 物品販売 | | 3,753 | 5,404 | 4,262 | 113.6 |
| その他 | | 766 | 1,248 | 1,640 | 214.1 |
| 交通業 | | 177 | 293 | 567 | 320.3 |
| 日雇及労働者 | | 1,676 | 2,495 | 5,439 | 324.5 |
| 雑業 | 1,499 | 387 | 414 | 2,236 | 577.8 |
| 家事使用人 | | 222 | 137 | 483 | 217.6 |
| 公務及自由業 | | 1,323 | 2,247 | 2,128 | 160.8 |
| 無職・職業不詳 | 637 | 876 | 1,544 | 1,643 | 187.6 |
| 総計 | 14,918 | 18,195 | 23,884 | 28,647 | 157.4 |

### 表5　鳴尾村職業別戸数の推移

（戸）

| | 明治37年 | 明治42年 | 大正３年 | 大正８年 | 大正８年の増減率（明治42年＝100） |
|---|---|---|---|---|---|
| 農作業 | 482 | 368 | 365 | 406 | 110.3 |
| 自作 | | 63 | 63 | 29 | 46.0 |
| 兼作 | | 99 | 96 | 86 | 86.9 |
| 小作 | | 206 | 206 | 291 | 141.3 |
| 園芸業 | | | | | |
| 養蚕業 | | | | | |
| 茶業 | | | | | |
| 林業及狩猟業 | | 1 | | | |
| 飼業 | | | 1 | | |
| 漁業及採藻業 | 56 | 75 | 97 | 71 | 94.7 |
| 工業 | 40 | 62 | 131 | 278 | 448.4 |
| 商業 | 118 | 164 | 223 | 173 | 105.5 |
| 物品販売 | | 153 | 198 | 158 | 103.3 |
| その他 | | 11 | 25 | 15 | 136.4 |
| 交通業 | | 5 | 5 | 31 | 620.0 |
| 日雇及労働者 | | 93 | 132 | 190 | 204.3 |
| 雑業 | 25 | 18 | 41 | 205 | 1138.9 |
| 家事使用人 | | 13 | 17 | 5 | 38.5 |
| 公務及自由業 | | 21 | 31 | 64 | 304.8 |
| 無職・職業不詳 | 12 | 7 | 16 | 20 | 285.7 |
| 総計 | 732 | 827 | 1,060 | 1,442 | 174.4 |

表４、５は『武庫郡誌』（大正10年武庫郡教育会）より報告者作成

は小作農家の増加によるところが大きい。なかでも工業、交通業、公務及自由業といった職業に従事する人の増加が大きく、鳴尾村は、この時期都会からの移住者の増加とそれに伴う住民の職業構成が著しく変貌したといえよう。

『武庫郡誌』には、郊外移住者の様子や衣食住の変化について次のように書かれている。「本郡（報告者注：武庫郡）海浜部一帯の地方は、風向の美に富み、名所旧跡亦すくなかざれば、古より天下の雅人俗客皆この地に憧憬せしが、（中略）明治38年阪神電気鉄道の開通するありて、交通の利便又疇昔の比ならざるに至りしかば、阪神人士を初め（原文のまま）、幾多の紳士神商先を争いて邸宅別墅を営み、都会の俗塵を避けて郊外の清爽なる生活を営む者、年を追いて増加するに至り」と阪神電気鉄道の開通によって都会から人口が流入している様子が記述されている。また、衣食住については「（鳴尾村は）維新前までは一二上流者を除きては、絹布類を纏うものなかりき。今も小松・小曾根の如き純農村部落にはこの美風存せるを見れど、一般に奢侈に傾きつつあり。阪神競馬倶楽部の競技場設置せられたるより、他府県人の出入多く、又都会より郊外生活のため来る者愈々多く、是等の人々との接触は、風俗に悪影響を及ぼしたること少なからず。元来本村は、（中略）家屋の構造低く、通風・採光に欠くるところ多かりしが、移住者は通風・採光共によき家屋を好むが故に、建築様式漸く変化し、旧来の低き家屋の外、通風採光良好にして、衛生的家屋を見るに至れり。衣食の方面も、その影響を受け、奢侈に傾けり。元来食物につきては、近村に比し頗る贅沢なりき。」と、鳴尾村に移住してくる人々からの影響が大きく、家屋の建築様式が衛生的になってきたり、衣食も奢侈になって生活の変化が大きいことが書かれている。

## ５．おわりに

雑誌『郊外生活』の沿線紳士録や『明治大正昭和神戸人名録』所収の日本紳士録には、明治末期から昭和初期にかけて阪神電気鉄道沿線や他の阪神地域に移住してきたと思われる住民が多数掲載されている。これらの人々が阪神地域に新たに形成した生活文化は何かを探るなかで、鳴尾村が大きな役割を担っていたのではないかと考え、文献調査や聞き取りを行ない、阪神地域の発展の基盤となった阪神電気鉄道の発展と役割と影響、および苺栽培を中心とした地域農業の歴史と変化を報告した。

本報告では、明治大正昭和人名録からの分析を試みたが十分に行なうことが出来なかった。今後は、武庫郡を中心とする阪神地域および鳴尾村について、地域を形成する住民の生活の視点から文献を整理していきたい。鳴尾村の生活文化に関する先行研究は全く無いといって過言ではない。鳴尾村の新たな生活文化の内容と形成過程を明らかにするためには、古くからその地域に住んでいた人々の生活実態を明らかにすること、移住してきた人々の生活様式を知ること、そして双方の生活様式や価値観の融和がどのように行われてきたかを検討する必要がある。今後さらに人名録を整理・分析し、鳴尾村を中心とした阪神地域の郊外生活文化形成を探っていきたい。

## 参考文献


１．給料生活者の家計調査、大阪市社会部労働課、昭和９年

２．郊外生活、太宰政夫、阪神電気鉄道、1914－1915

３．農家経済調査、農商務省農務局、大正13年

４．農家経済調査、農商務省農務局、昭和９年

5．阪神電気鉄道の発達と阪神地域における郊外生活の形成、甲子園短期大学紀要、No.26、永藤清子、2007
6．武庫郡誌、武庫郡教育会、大正10年
7．明治大正昭和神戸人名録、日本図書センター、1989
8．労働者の家計調査、大阪市社会部労働課、昭和８年